慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	普仏戦争と渡六之介の『巴里籠城日誌』
Sub Title	Un Journal du Siège de Paris d'un officier japonais Watari Rokunosuke
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.46- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

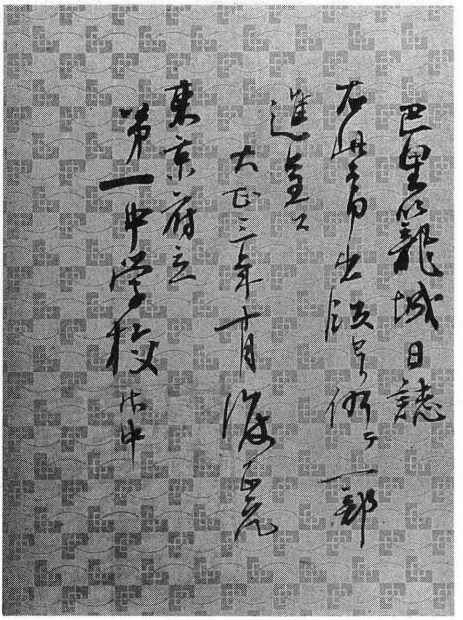
普仏戦争と渡六之介の『巴里籠城日誌』

松原秀一

フランス第二帝政に終止符をうった普仏戦争は明治三年におこり、ドイツ統一を完成させる大きな布石となるとともに独仏間に長く続く深い対立を作りだした。日本の旧制高校生がフランス語を習う副読本に良く使われた『アルザスの二少年のフランス周行』(1)や近年色々論議を呼んだアルフォンズ・ドーデの『最後の授業』を始めとする短編集『月曜物語』やモーパッサンの『二人の友』など初歩を終わった日本の学生が広く習った中級の読み物にもこの戦争に題材を取ったものが少なくない。幕末以来、フランスに範をとっていた日本の軍制がプロイセン、ひいてはドイツに傾斜していったのもこの戦争が契機となっていると見られよう。普仏戦争は色々な面から見ることができるが、一つには九年の兵役制を取っていた職業軍人的なフランスと兵役期間が三年と短いプロシヤの戦いでもあり、士族と平民の戦いであった西南戦争を思わせるものもあり、それまで日本で戦将として高く評価されていたナポレオンにビスマルク、モルトケが加わることとなった。普仏戦争後もジュール・ヴェルヌの科学小説が次々と訳されたりして、技術先進国としてのフランスの姿も紹介されていくが、この戦争の結果共和制を取ったフランスと戦後のパリ市民のパリ・コミューヌは明治の立憲天皇制の立場からは危険視され日本ではフランスは華やかだが危険思想の国、享楽的な国、『華のパリ』即ち淫蕩の街の面が強調されていくこととなる。

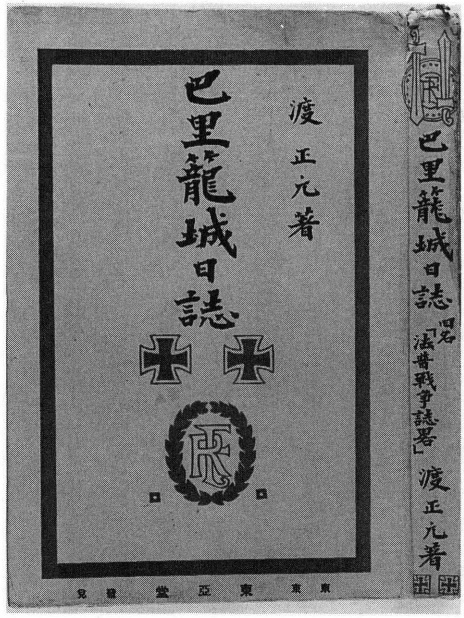
パリ・コミューヌについては日本でも多くの紹介があるが、それに先立つパリ包囲戦についても思いの外文献が多くないようである。この包囲戦にはプロイセン軍中には日本から品川弥二郎、大山巌、林有造、池田弥一の四人が観戦将校として加わっており、籠城側にはフランスの士官学校に留学中だった渡正元（六之介）が居て八ヶ月の籠城をしていたのであった。フランスは当時の軍事大国で明治三年十月には太政官は公式に陸軍はフランス式、海軍はイギリス式にすることを決定し布告したばかりであった。[2] この時にはナポレオン三世は既にセダンで九月四日にプロイセン軍に降伏しフランスは共和制を宣言していた。山県有朋、西郷従道もヨーロッパに滞在し普仏戦争を観戦し八月二日に帰国し、八月二十五日には前述の大山巌たちが普仏戦争の調査を命じられ出立している。

渡六之介の『巴里籠城日誌』については既に河盛好蔵氏による紹介が『巴里好日』（文化出版社刊昭和54年、初出は産経新聞、一九七八年八月一日）にある。[3] 長らく一本を入手したいものと思っていたが、今春たまたま第一次大戦勃発に際して著者が改訂再版した活字本の自筆の献辞つき贈呈本を神田の田村書店で見つけることが出来た。菊判三



百二十頁で元判にある彩色挿絵、地図、単色肖像図を再録するほか巻頭に九葉の写真が付けてある。その最初は大礼服に多くの勲章を付けた著者の写真とパリ籠城時代の写真ならびにフランスの士官学校エコール・ド・サンシールの生徒として士官の制服を付けた著者の写真であり、二枚目はパリ籠城当時著者が拾って帰国後『遊就館』に寄付したプロイセン軍の砲弾の破片三個の写真である。残りは当時市販されていたと思われる銅板画で砲撃を受けているパリの図で右上に気球が浮かんでいるもの、ナポレオン三世、ウィルヘルム一世、モルトケ、ビスマルク、皇妃ユージェニーと王子、マクマオン、バゼーヌ、ティエール、トロシュ、ガンベッタなどの写真などで最後は死んでベッドに横たわるナポレオン三世の写真である。扉には『巴里籠城日誌／右冊子を出版セリ仍テ一部／進呈ス／大正三年十月渡正元／東京府立／第一中学校　御中』と毛筆で献辞が書かれている。

本書の元版は二組が塾図書館に所蔵されていて〔121／50／8／1～8と187／141／8／1～8〕一組は太田黒亨氏の寄贈によるものである。大正八年二月二十五日に受け入れられたものであるが、第一巻と第二巻、第五巻、第六巻、第七巻、第八巻の見返しには『長束蔵書』という朱印が押してある。第一巻の見返しに『明治第四辛未夏六月刊行／法普戦争誌略畧／西洋一千八百七十一年』とあり各巻約五十丁で七冊、第八巻のみが薄く『追加』とあって二十八丁となっている。



このあとに奥付けが『官版／御用御書物師／須原屋茂兵衛』とある。入手した版は大正三年十一月刊の九版であり、『小序』によると『然るに今年八月、圖らずも、歐州の天、戰雲漲り、列強互に其国力を盡して戰い、全歐の地、殆ど千軍萬馬の蹂躪する所となり、實に古今未曾有の一大動亂となりとす。此機に際し、往昔の普佛戰争の事蹟を余に聞かんと欲する人多く、且余の舊著を再刊して、世に公にせば、當時の状況躍如として見るべく、今日の参考に資する所あらんと。之を余に慫慂する者亦少なからず。舊著固より之に當らずと雖、亦黙止し難き時状もあれば、其謬誤あるものは之を訂正して、題號を巴里籠城日誌と改め、更に刊行することとせり。』と第一次大戰を期に再刊した事情を説明している。同書の奥付けを信じれば東亜堂書房から十月十三日に初版発兌、十五日に再版、十七日に三版、二十日に四版、二十二日五版、二十五日六版、二十八日七版、三十日八版で十一月一日に九版がでたことになる。にわかには信じがたいが好評で増刷を重ねたのは確かであろう。

著者渡六之介は天保十年（1839）一月に田中善平の三男として江戸に生まれ元治元年（1864）に渡家を継ぎ、兵学寮生徒であった明治二年（1869）三十歳の時フランス留学を命じられパリに到着したのが普仏戰争勃発の直前、明治三年三月一日であった。エムス電報改竄の挑発に乗ってフランスが開戰を決定したのが七月十四日であり、この籠城記はフ

ランス使節がベルリンに向かった七月十一日のことから書き起こし、二月十九日で終わっている。初版の第七巻三十六葉の『付言』を引けば

『余か此戦争誌略を集むる實に西暦七月十一日に始つて今二月十九日に至里二国の戦和未た全く定まらず曩に一月二十八日巴里府開城して和議談判の為三週間の解軍弭兵を約し其後五日の延期をなし日數都て二十六日即ち二月二十四日正午十二字まて也（我正月六日）故に今日未た其戦和の判然たる向背を知る可らす然るに余今爰に毫を抛けて此冊を終るものは即明日我　皇朝軍事監察使の諸公法の巴里府を発して英京倫敦府へ発向せらるへき報を聞て遽に曾て記輯したる所の冊子を行李中より出し併せて之を総括し其旅舘に至り諸公に就て謹むて之を我在　廷の諸賢に呈せむことを希へはなり』

とある。この『皇朝軍事監察使』については大正十三年の再刊の『小序』に続く『附言』で初版に次の様に括弧で補っている。なお再刊本は総ルビであるが今ふりがなは省いた。『依て思ふ、余他日、帰　朝の日、閑を得、校討浄寫し、收めて一巻となし、以て在　廷諸公に呈せば、庶幾くは、當日の事情を報ずるの一助たるに足るべしと。再び之を巾笥に蔵めたり。然るに今日圖らずも　本朝軍事視察使の諸士に巴里府の旅館に面謁するを得、（普仏戦争の起るや。我朝廷は薩、長、土、肥の士〔大山彌助、品川彌二郎、林有造、池田彌一〕の四士を軍事視察員として派遣せらる四士は終始独逸軍の本營に在り。適々巴里府の講和開城の日、其糧食輸入の列車に依て巴里に入府す）……』

大山の一行がアメリカ経由でベルリンに到着したのは十月下旬でありパリを包囲しているプロイセン軍の所に到着したのはパリ開城の一月前であった。[5] 包囲と砲撃はみたものの戦闘の大半は終わっていた。従ってパリに入って渡六之介の籠城記を見た一行はこの記録を見て実戦の貴重な報告としてそのまま持ち帰り、官版として出版したのであった。

渡六之介はパリ籠城中に自分の見聞の他各種の新聞を抄録していて普仏戦争の体験記として極めて貴重な記録となっている。普仏戦争の籠城記としてはフランシスク・サルセーFrancisque SarcseyのLe siège de Parisが有名でありアルフォンズ・ドーデのSouvenirs d'un homme de lettresのほか共和国宣言と共に長年の追放からパリに戻って籠城に参加したヴィクトール・ユゴーの日記[8]など各種の記録があるが我々に取っては日本人としての渡の記録は貴重なものであろう。この日誌が簡単に入手できないのは遺憾である。本来は当時の新聞との照合や初版と再版の異動も調べなければならないが取り敢えず、内容の一斑を紹介しよう。第一巻で普仏戦争の原因としてスペイン王位継承問題を取り上げているのは当然だが、ホーヘンゾルレンがスペインの王位に今後も就かないという条件の提示にたいしての返事の期限が七月十四日の十二時迄であったがプロイセン王が使節の謁見を拒絶したので兵を挙げることに決したと記し『即ち西洋一千八百七十年第七月十四日即ち我明治第三庚午六月十六日也。』といっている。我が国が先進国に倣って太陰太陽暦を採用したのは明治六年であるので日付がずれるのである。この晩市内に出てみた渡は人出で馬車も通行出来ないのを観察している。八月一日フランス軍の本営は国境のメス市に置かれたが戦闘で火力の勝るプロイセン軍の前ではフランス軍に不利で大将ドゥエーは戦死し多くの死傷者を出した。フランス軍の青銅砲にたいしてプロイセン軍の大砲は鉄製であった。『大将ドゥエイ氏は厳しく下知して諸隊を繰出し苦戦せしとそ其大砲は僅に三門なりし上に又普の大砲絶間なく無數の大小連發せるを以て法軍は中央大に敗けドウエー氏討死し二軍の將ゼネラルモンリー氏も又手負たり此時法軍の先鋒隊なるチュルコ隊〔亜弗利加の黒人隊也素より勇壮乃一戦隊なるが痛く苦戦し見方の死傷を踏越へ銃剣の接戦に及しかとも哀哉皆普軍無数のミトライユース劇射下に屍を並へたりと云此ミトラユースと云ふハ近年発明乃回転連發の奇砲也』

ミトライユーズ Mitrailleuse は機関銃であるが多くの砲身を回転させる方式のガトリング砲で当時の先端兵器であった。アメリカ南北戦争や戊申戦争でも使われたが幕末に我が国に輸入された三台の内、二台は河合継之助の元にあり一台に五千両が払われことが知られている。

この戦争ではプロイセン軍大敗の虚報を流し却ってフランス軍の敗北とわかった時の失望を大きくするといった情報戦、また『探偵』の使用、ジプシーの城外追放などといった近代戦の諸様相も見せそれらも渡によって良く記録されている。国民が紙幣を正金に替えだすので5フランの銀貨を新鋳し国立銀行で引換えに応じた。渡六之介も『始め引換人の入るときハ片手に紙幣を握り最簡便なれとも出る時は銀銭を負檐し其勞殊に甚し余素より一書生にて其所持僅に七百五十圓の銀銭也然とも其門を出るに及んてハ掌中又重きを覺えたり今日午後一字より三字迄俟ち漸く此紙幣を引換へ數萬の群中を抜出せり○方今紙幣引換えとして毎日此両替所に集る人民幾億萬なるを知る可らす而して引換の銀は咸く新製の圓大なる銀銭なり惟ふに今般法|政府にて何程鑄造せしや其數誠に算計すへからす昔日市中に此銀銭甚た尠し之れ量重くして持運に不便なれりハなり然るに此度戦争以来市中に銀銭多く従来の金銭甚た稀也』（第一巻二十八、九丁）

両国とも捕虜を手厚く扱うことも注目している。在留敵国人の扱いについても『○巴里府市街布令書中に曰　一　巴里市在住の日耳曼国の人民中或ハ家屋を所持し或ハ久しく在住したの者にて其儘巴里府在住を願ふものは是を許容せり』と布告を写しているが、渡は注記して『按するに今般法|国の戦争其始めより萬事甚た公やけにして敵国人民政府内に在住を禁せす軍中の事情報告書も直にこれを公布す其所置公明に似たりと雖も戦闘上に於て大に損失ある可し其故ハ巴里府中に日々出す朝暮の壁書及軍中報知日誌等之れを市街に出せば忽ち羽翼を生して敵地に飛行し敵軍坐して府内の事情を知り其機に投して莫大の利益を得へしと思へはなり』（巻一、三十八、九丁）と危ぶんでいる。

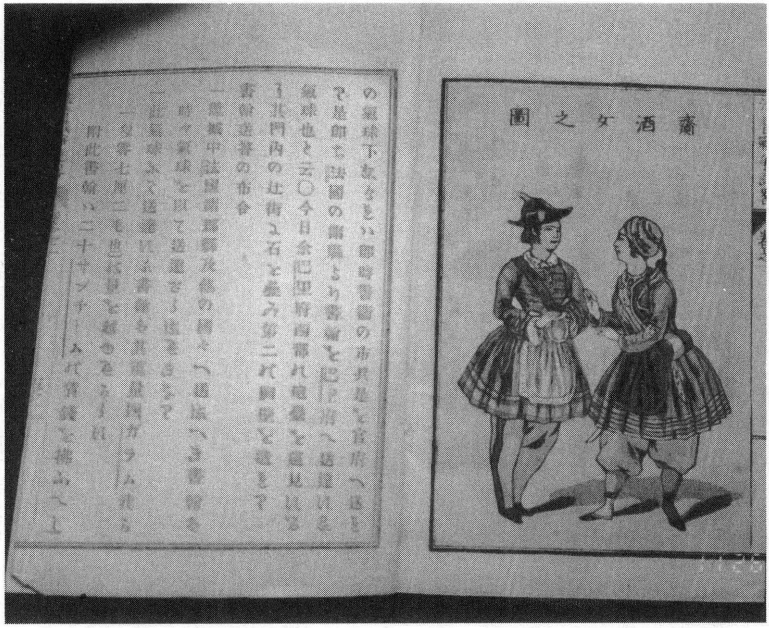
プロイセン軍の進出に際して何故皇帝がパリに戻って防戦しないのか渡は理解できなかった。これには皇妃ユージェニーの政策もあったが(9)渡は次の如く書いている。

『〇余今日法人に問ふて曰余今戦争の状態を見聞するに普軍追々進入し既に大群巴里府周圍の諸縣を蹂躙せむ其勢ひ不日に此府を攻撃すへし然るに法帝は此城に入り防禦の指麾を司らさるやと問ふ蓋し那破倫は帝なり素より城中に在て指麾すへきなり然れ共巴里府人帝を憎罵るの甚しきを知る故に殊更に問を設けたるなり渠答て曰く那破倫巴里府に帰りなハ直に衆の為に必す殺害せらるへし其故は今度の戦争素より帝の方寸に出て廟算を失ひ敗軍また人多く死せり其上本城に敵軍迫りて法国危急の機に至るハ全く帝の所為にして衆の深く恨む所也故に今帝再ひ帰城せハ殆と弑せられさるを得スト〇余又問夫々勝敗ハ兵事の常にして帝の罪とのみ云ふ可らす今日の危急豈之を論するに遑あらむや特に那破倫は法国の帝たり宜しく全国乃人之を尊奉し衆皆協心勠力し防戦すへき也如何そ今日の切迫に莅むて我か帝を拒み憎むの理あらむや渠れ荅て曰今法全国の恨み已に彼に帰したり救ふ可からすと今日巴里府内衆庶の乃景情既に斯乃如し他日事情の参考に供せむ為今爰に之を記るす』(巻二、七、八丁)

九月三日にセダンは開城しナポレオン三世は捕虜となり翌日、共和制が宣言されると渡は知人に次の如く問い質している。

『今日余リューテナン、コロネル〔歩兵副総督〕レスヒョー氏〔此人余か知る人也去る八月六日の戦ひに其太股に弾丸を受け治療の為め帰せり此人出陣の時歩兵頭取官にてありしか此度當官に昇進せり余と同宿してある故日々親しく語る〕問ふて曰今般法軍大に敗れ左翼乃將帥マクマオン傷き數萬の死傷及四萬乃兵皆俘虜と成り那破倫も竟に虜に就きたりて而て法国政體を變し新たに共和の政度を建る布令あり余按するに國一日も其主なかるへからす故に今日立つる處の

共和の政度も法帝の虜中假りに設けたるにして他日此軍畢るの後帝皈しハ必す以前の如く帝位に置き立君の政髄に復するならむ然らハ今新たに共和政髄の名を置かすとも太子既に軍中に在り幼年なれとも帝位に登るへき約議已に定まれり然るに何の故今此令を布けりや〔今年五月二十一日布令曰那破倫百歳の後は太子帝位に登るべき旨を普く全国に知らしめ堅く其約を結へり〕答今日の共和政度苟も非議すへからす那破倫ハ再ひ此国に入る可らすと云○問其理如何む他日此軍の勝敗相分たハ普国より那破倫を送帰せむ然らハ衆之を如何するや答法人は再ひ那破倫を国内に入る、肯むせす其故は今度の戦争全く帝好みて之を起せるに在り然るに其策成らす其令善からす其軍敗れ許多の兵士を失ひ子弟を殺せり是衆の恨み憎む處にして其罪誠に容れさる所也故に今法国には其帝位を剝き那破倫を棄たり仍て渠今日に於ては一兵士一独夫に異なる事無し假令普国許し放つとも更に法国に関係せさるなり渠他邦に去つて其居を定むへし○問夫れ軍の勝敗は時運にして英雄も亦能し難き所也法国の兵素なり勇なりと雖も連日の敗報ハ即ち法国は不運不幸なりと云ふ可し又その指揮號令の帝に出るは是其国に主たるの任なれハ也今度の敗衄を取る必す帝の罪と云ふへからす果て時運か然らは是臣民として帝を拒み剰へ俘虜となりたるを棄て之を助けす却て其機に乗し之を放逐するの理あらむや渠答ふ法全国の人民に二種の別ちあり一方は帝を憎み又一は帝を佐く然るにいまや二種合して帝を怨罵せり其聲市街に充溢し實に億兆離心の極如何むともすへき策なしと云へり』続いて渡は普仏戦争の原因をさぐり一八六六年の普墺戦争以来のプロイセンの躍進振りを眺め『余竊に惟ふに今歐羅巴各国就中英法普の三国に於てハ文明開化強富の盛むなるは恐らくハ今日宇内の魁と謂つへし然も其事状情態を観察するに其人心疎闊軽薄にして節義なるものは全く無きに近し我か日本の魂を以て視るときにハ若し国帝敵の虜となるときは全国の人憤激しその観を忘れ仇を報せむ然るに人心の開化究れる時は其節義に疎き斯の如きに至る惟ふに是れ随て生するの弊ならむ今や歐羅巴各国の開化實に遺漏なしと雖も敢て嘆すへきハ只此



酒女之圖

の氣球下敷なもい即時警衛の市民是を官府へ送るを見即て法國の鄙鎮より警衛を配て海へ送達せる氣球也と云○今日余巴里府西郡れ嘴鼻を檢見れるに北門内の辻街と石を畳み第三の鎮れ鎮を繞きて

書付送達の布令

一悪風中法國諸郡及他の國々へ通信の書籍を時々氣球を以て送達せる送達をなす

一氣球を以て送達せる書籍を其電報國ガラム迄なる

一多等七月二七世紀を越せるを見るべし

附此再伺い二十サンチーみて賃錢を拂ふべし

もの を視法何者なりやと問ふ者法語之をカンチュエールと(酒女の謂)號して戎衣中に兵士に酒及嫖耐に類を賣り與ふ者也と云是を都てゼネラル以下武官の妻及兵卒の妻子なりと云○同二十六日法國政府の一官員チエール氏義に歐羅巴四大國へ使行べき命を蒙して英吉利へ往ひて歸をり今日又ツーエル郡の法國別府なる再び發して墨國に彼得堡府へ向待て發足せりと此使節ハ歐洲中四大強國英魯墺以の國論を問ひ猶二國に和平の取扱を乞爲也と思ハる○今朝第十字頃巴里府内ワンノウ街と一

節義を養成し得さるの弊害なり』『人心開化の地に限り人心輕浮にして節義の疎きは萬邦皆同し嗟其国の教を立つるもの宜しく爰に注意せすむハある可からす』（巻二、十五丁〜十八丁）と欧化と忠孝の衰微を危惧している。

これからパリ籠城が始まるのであるが渡の観察は赤十字やパリ周辺の堡塁にも及び食料の備蓄なども観察している。軍隊に女性が糧食係りとしているのも珍しかったらしい。『此節運動せる兵隊中に三五人の婦女相ひ混せり其行装兵隊に均しき衣服を着し腰に袴の如きものを纏ひてその腰部を被ひ而して金属を以て製したる小樽の如きものを肩に掛け兵隊と共に運動するものを視る何者ならむと問ふに法語之をカンチニュールと〔斎酒女の誼〕号して或は陣中の兵士に酒及焼酎の類を売り輿ふる者也と都てゼネラル以下武官の娘及兵卒の妻子なりと云』（巻二、五十丁）とあって彩色の挿絵が入っている。

籠城による窮乏振りや、パンの質の下落、犬、猫、鼠の肉が売られたこと、物価の騰貴、また開城のニュースと共に商店が隠匿して置いた食料を慌てて売り出すことなど、他の籠城記に見られることも記してある。『近日府内の食糧ハ少量の鹽肉及鹽魚のみにて鹽漬させる馬肉を得るも甚難し鹽肉及鹽魚の味ひ甚た佳ならす』『方今府内食料は獣肉咸く盡きて政府貯蔵の鹽漬の獣肉及び鹽魚等を少々つつ市中に分配す而して市中犬猫及鼠を取て食ふこと最も甚し過日以来市内運輸の馬車は馬を屠る既に夥し然れとも此馬肉普ねく市人に給するに足らす故に政府令して屠者及ひ獣肉商人等に獣肉の代りに乾魚及鹽魚の類を賣らしめたり○過日以来府内處々に犬猫鼠の屠者多く其店を開けり而して今日犬肉最も高價にして其股肉一枝の價法貨八フラン〔我が一両貳分貳朱に當る〕なりと云此程市人食料の肉多くは犬猫の肉なりと云市中野菜最も尠なく且府内麺包を製する穀類乏しく物價彌ゝ沸騰の由なり』『余亦鹽漬獣肉の味を知る』足りないのは食料のみではない。ガスも薪も蠟燭も乏しくなり年末に向かって寒さも厳しくなり疫病も流行する。そこにプロイセ

ン軍の砲撃である。渡は砲弾を拾い死者の数を記録し砲弾の大きさ、射程も記録している。ガンベッタの気球に依る脱出の他、打ち落とされた気球、セーヌ河に通信文を入れた瓶が流れて来る事、鳩の運んでくるマイクロフィルムによる通信など克明に記しているが、他方では日曜日に手を携えて散策する男女を見て『此輩皆今法国殆むと敵の掌中に陥らむとし傾頽危亡旦夕に逼り其危き實に朝露の如くなるを知らさるものに似たり巴里府人は虚飾を専らとし言語を巧みにして内に報国の赤心なく常に國事を罵しれとも危急の眼目を驚愕せしむる也惟ふに今法国の兵器機会は精好にして實に善美を極むと雖も廟堂に人材なく草莽に節義なく威部傾頽して梟敵にあたるなきは正氣なし嗟ゝ國夫れ奇器ありと雖も人材なけれは亦是れ何奈ともすること能はさるのみ』(巻四、十五丁)と憤慨し、慨嘆している。

日誌の記述は『○今日に至り巴里府内平定異聞なし日誌を閲するに今度法国陸軍大兵学校の規律を改正し新則を建て此の校をサンシール校と號せりと』と終わっている。渡六之介はパリ開城後もサンシール校で留学を続けている。この間のパリ・コミューヌにも記録があったことと思うが何も知られていないのは残念なことである。

渡六之介は帰国後陸軍少佐、参謀局諜報提理兼幼年学校次長となり太政官書記官、参事院議官補、参事院議官県恩給局主事、元老院議官を歴任し明治二十三年以降は勅撰議員となっている。大正三年の再刊本の表紙には『貴族院議員渡　正元著　巴里籠城日誌』とあるが中表紙の裏に短冊形の貼り紙があり赤字で『扉　貴族院議員　は削除すべきもの／本文第一頁　渡正元は渡六乃介と訂正すべきもの／に付き右正誤す／発行者識』と一札してある。大正十三年一月二十九日に没した。貴族院議員、錦鶏間祗候従三位勲二等であったが没後正三位を贈られている。[10]

この紹介の渡六之介の日誌からの引用は明治四年の初版によった。再版では法国は佛国になり変体仮名も消え漢字は総ルビとなっている。中田君存命中に入手していれば『えび伴』あたりで彼に見せて徳国の葡萄酒を共に楽しみ塾考古

学研究の祖であった大山柏先生（大山巌次男）などの話にも興じ色々示唆も受けられたであろうにと惜しまれる。拙文を霊前に捧げる。

注

（1）G. Bruno (Madame Alfred Fouillee, née Augustine Tuillerie): *Le tour de la France par deux enfants, Devoir et Patrie*, liver de lecture courante, Paris, 1877, Librairie classique d'Eugene Belin.

（2）篠原宏『陸軍創設史、フランス軍事顧問団の影』　刊、一九八三年

（3）河盛好蔵『巴里好日』文化出版社刊、昭和五四年。この著書の大部分は河盛好蔵『私の随想選』（全七巻新潮社刊）の第一巻、一九九一年一月に採録されているので同氏の紹介文『巴里籠城日記』は同書九十～九十二頁で読むことか出来る。

（4）富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ刊、一九八五年刊

（5）児玉譲『大山巌』全四巻の第一巻『戊申戦争』

（6）Francisque Sarcey: *Le Siège de Paris, Impressions et souvenirs*, 1871. 筆者の読んだのは Collection Nelson 版である。ドイツでも同書の抜粋が中級読本として Französische und englische Shulbibliothek の第五九冊として Ulrick Cosack の編著で出ていて、一八九四年の三版に際してコザックに寄せたサルセエの書簡が引用されている。短いものなので参考に全文を挙げておく。Monsieur,

Je vous remercie de l'honneur que vous m'avez fait, en presentant mon livre à vos compatriotes. Vous avez bien fait de supprimer certains passages. Je ne les ecrirais plus aujourd'hui. Songez que le livre a été jeté a de verve dans les huit derniers jours du siège devant une cheminée sans feu, devant une table sans autre pain que du pain de paille hachée. Je n'ai laissé subsister ces passages que parce qu'ils marquent l'état d'esprits des Parisiens, à ce moment unique de notre histoire.

Je vous serre la main.

Francisque Sarcey.

（7）Alphonse Daudet: *Souvenirs d'un homme de Lettres*. Paris. C. Marpon et E. Flammarion, s. d. (1888)

(8) Victor Hugo: *Choses Vues.* 筆者の読んだのはネルソン版 Choses Vues に付された巴里籠城の期間の日記の抜粋であったがその后、一九五三年にユゴーの手帖がアンリ・ギュマンによってガリマール社から刊行された。Victor Hugo: *Carnet Intimes 1870–1871*, rublier et pierenter pan Henri Guillemin, Gallimard, 1953。

(9) パリ包囲戦についてのフランスの文献は枚挙にいとまないが筆者が特に参照した一冊は Georges Duveau: *Le Siège de Paris, septembre 1870–janviers 1871*, Hachette, 1939

(10) 稲村徹元他編『大正過去帳物故人名事典』東京美術社刊、昭和四八年。